

## Interview

### 管理職の視点

# これからの学校づくりは 特別活動が基盤に

34歳で校長に就任した池田先生は、特別活動を基盤に「誰一人取り残さず、全員が挑戦する学校」の実現を目指されています。そうした思いを抱くようになった、池田先生ご自身の失敗体験とそこからのチャレンジをお聞きました。

香里ヌヴェール学院中学校・高校  
校長

## 池田靖章

いけだ・やすあき ● 京都教育大学大学院を卒業後、大阪高校の教員を経て、2019年度より香里ヌヴェール学院の校長に。大阪高校の最後の3年間でち上がりでみた34人学級では、生徒が枠にとらわれない多彩な進路選択（マレーシアや台湾の大学への進学、eスポーツのプロ契約、不登校経験からの大学のプレゼン入試合格など）をすると同時に、進路決定率100%も達成した。香里ヌヴェール学院でもさまざまな進路選択ができるよう、外部連携を積極的に進め、海外からビジネスの現場まで生徒を柔軟に接続することを構想している。

人を責めず助け合う関係を  
特活を基盤に築いていく

教師がクラスづくりや進路選択を牽引するのではなく、生徒が何をするか自分で決める。生徒が失敗しても教師がフォローし、誰一人取り残さない。前任の大阪高校で僕はそんな学級経営を目指し、香里ヌヴェール学院でもその実現を思い描いています。

きっかけは、教員3年目の手痛い失敗でした。人気者と思っていた生徒を軸にクラスをつくり、満足度が高いクラスにできたと過信していたら、軸にした生徒は不本意だったことを卒業式の日にかされたのです。ショックでした。「この子はこうするといい」という教員の勘は、研ぎ澄ませれば9割は当たるかもしれない。でも1割は外れます。学校教育がそれではダメだと思ったのです。

だから最初は、残り1割も外さない手法を探しました。けれども、カウンセリングやコーチングを学び、「答えは本人の中にある」という考えに出会って、価値観が根本から覆りました。教師は無理に予測しなくていい。生徒が何をしたいのか、あるがままを捉え、教師はそれを支援すればいいのだ、と思うようになったのです。

ただ、生徒のあるがままは、本人

の自己開示なしに捉えられません。そこでベースとして必要になるのが、「全員が承認されている場」です。自分を認めていない教師や同級生がいる前で、本音は出さないうえ。

だから特別活動（以下、特活）が鍵を握るのです。なぜなら、特活は教科指導以上に生徒の多彩な面を評価できるからです。例えば僕は高校時代、英語の授業ではテストが20点台で評価されていませんでした。ですが、語学研修と絡めた特活では、英語はダメでも進んで外国の歴史を調べたことなどを絶賛してもらえました。今では海外進学支援が、僕の専門分野の一つになっています。

また、特活は誰一人取り残さずに探究心に火をともしせる場でもあります。特定の教科の授業に全生徒が夢中になるのは、自分にも苦手科目があったことを思えば至難の業ですが、特活のLHRで「クラスやクラスの仲間のこと」を考えるのであれば、全員が自分で探究できるからです。

大阪高校で担任した学級では、LHRで安心してクラスのことを議論できるよう、春先は場づくりも重視しました。50分授業なら30分はペアで互いの良い点や失敗談を照れずに言い合う、つまり認め合うワークをして、人を茶化さない場にしてから、本題に入



るようにしたのです。

朝のSHRではある活動を取り入れられました。「最後に教室を出た生徒が窓の鍵を閉め忘れた」など、生徒が失敗したときに、本人は責めず、その失敗に「自分たちは何ができたか」を全員で紙に書くようにしたのです。

こうした活動を続けていくと、何か問題が起きてても、生徒は人を否定せず、課題を全員で解決することを乐しむようになりました。互いを認め合い、失敗しても助けてもらえる。学校にそんな安全・安心の場をつくる基盤となるのが特活なわけです。

### 相手の意見に自分の思いを足し「全員の自分事」に変えていく

生徒同士で意見がぶつかるようなテーマでは、相手の意見に「この条件ならいい」と自分の思いを足して話し合おう、と促していきました。

修学旅行の沖縄での班行動について、海に行くか、国際通りで買い物をするかでもめたグループがありました。そこで双方が相手の意見に思いを足していくと「海に入らなくていいなら行ってもいい」「1時間なら買い物につき合う」と折り合える部分が見えてきて、最終的に「この海の家を集合場所にすれば、海にも行けるし、横の免税店で買い物もできるね」と、多数決

ではない、全員での合意を自力で導き出したのです。

このやり方は、教師と生徒の合意形成にも使いました。例えばLHRで何をするかも、教師が一方的には決めず、行事を踏まえた原案を出したうえで、生徒から「これをしたい」という提案があればそれもやります、という合意形成を図ったのです。班ごとに行き先が異なる修学旅行では、「クラス全員でも何かしたい」という提案が生徒からあり、旅行後に、各班が体験したことを発表するプレゼン大会をLHRで開きました。

自分たちが発案した活動を行うときは、生徒はそれぞれ遊んでいるように楽しみます。ですが、LHRの最後の5分間には必ず振り返りを入れ、気づいたことや感じたことを言語化することで、おのおのがしっかりと学びも得られるようにしました。

具体的に何を学んだのかといえば、自分の頭で考え意見を出すことや、相手の意見を聴くことの大切さ。そのうえで、一方の意見を切り捨てるのではなく、批判するだけの評論家になら

るのではなく、お互いに対案を出して自分事化しながら合意形成を図ることです。こうした力は、実社会でも存分に生かしていきますよね。

### 挑戦と失敗を教員がフォローし生徒の自己実現と社会実現を

大阪高校で最後に3年間受けもったクラスの卒業式は、忘れられない日になりました。特活を軸に認め合ってきた生徒一人ひとりに、式典後、教室で「感謝を伝えたい人」と「10年後のビジョン」を語ってもらったら、保護者も見守るなかで生徒たちの話がとまらず、2時間もかかったのです。彼ら彼女らのなかには中学校では成績がいまひとつで注目してもらえず、高校入学時は自信なさげで、無気力に見える子もいました。その子たちが涙を浮かべ、キラキラした目で、自分の未来を、それも「社会にこんなふう

に貢献したい」と自己実現の上にある社会実現まで語ったんです。僕も保護者も泣きっぱなしでした。

その体験を経たことで、特活やLHRこそ学校の核になるといふ思いは

一層強まりました。もっと言うと、日常のHRにこそ教育の本質があり、そこを疎かにするならば教師の存在を問われる、とすら思っています。

香里ヌヴェール学院でも、校長として、特活を基盤に、誰一人取り残さず、生徒が認め合い、探究し、挑戦し、失敗しても教員やまわりがフォローして、全員がその体験すべてから学ぶ場をつくりたい、と思っています。本校には「挑戦したいけれど勇気がでなくて悶々としている子」に来てほしいんですよ。そうした子が、自身の挑戦と失敗から学びを得て、キャリアを切り拓いてほしい。その結果として、欧米・アジアの大学から国内の大学、大企業からスタートアップの企業まで、生徒がさまざまな進路を自分の意志で目指せる学校を実現させたいと考えています。

## 誰一人取り残さず、認め合い、探究し、挑戦する。その実現を特別活動で。

